

句集

月下美人

岩原

うつぎ



## 序

親愛なる句輩である能勢の岩原うつきさんも又句集を編まれることになった。

ウェブサイト『ゴスペル俳句』のメンバーとして入会されたのは二〇〇三年頃であったと思う。既にしっかりとした写生術を身につけておられたが、みのる選を信じてさらに努力を重ねられ今日に至っている。

うつきさんの作品は即物写生主義であり虚構したものは彼女の好みに合わないのがある。すべて物を見て感ずるところをありのままに客観することで成功している。印象を鮮明に写生するには的確に焦点を捉えることである。そのためには徹底した省略が求められる。

一本の杭秋水をニタ分けす

窯二つ阿吽に並ぶ炭焼き場

澄んだ川面に一本の杭が直立し、それに塞かれた流れが美しい水脈を描いているのである。静寂なあたりの景とゆったり流れゆく秋水の様子は省略されているが、「ニタ分けす」の措辞によって具体的に連想が働く。後者は、阿吽という一見そぐわないと思われる言葉の斡旋によって二つの炭焼き窯が一方は窯出しが終わって安堵の口を開き、他方は堅く鎖された窯口から煙が洩れてまさに炭焼の最中であることを的確に写している。炭焼場の活気と煤で真っ黒になりながらそこで働く人たちの様子までもが見えて広がるのである。

滑稽は俳句の大切な要素であるが、決して奇をてらうものではなく写生の訓練によつ

てごく自然に滲み出るのである。例えば、次の二句は真摯な姿勢で対象物に心を通わせ、自分自身を対象物に同化させることで授かった佳句である。

シートベルト要る助手席の大西瓜

対局をと見かう見して扇風機

再選にあたって、うつぎさんはご主人の介護を詠んだ作品は省きたいと言われたが私は気が進まなかった。心の内を直喩するのではなく客観写生によって包み込まれた表現こそが、本物の俳句であることを読者に伝えたいと願ったからである。

小康の夫を連れ出し蛭狩

退院の夫に新茶の封を切る

なんでもない作品だと思うかも知れないが、闘病のご主人の気分が少しでも和らぐようにと祈りつつ介護に尽くされるうつぎさんの健気なやさしさがひしと伝わってくるのである。

能勢は自然環境に恵まれた俳句の宝庫であり育まれた親しい仲間との俳縁も又然りである。共に切磋琢磨して能勢のよき香りを発信し続けてほしいと切に願って序の言葉としたい。

平成三〇年五月吉日

やまだみのる







每日句會入選句

大とんど月を焦がさむばかりかな

着膨れてシートベルトのままならず

リリーフは屈強の婿餅を搗く

ふうふうと湯気踊らせて七日粥

ありたけの鍋勢揃ひ年用意

外は雪といひつ訪問ナース来る

ポケットに溜まる小銭や年の市

日記果つ何時も誰かに助けられ

ポインセチア並びしナース詰所かな

徐にマフラーを解き切り出しぬ

駈けてくる子やマフラーを翻し

神木の橡の実一つ御守りに

雨樋の行方を探す  
颱風禍

きのご展一目で毒と分かる紅

雨の稲架脚踏んまへて  
撓みけり

次々と棚田呑み込み霧走る

キヤタピラの轍にあらず猪の道

遠雷や小さき臍ある力石

夕端居今日の介護を恙無く

不揃ひの椅子卓並べ滝見茶屋

白蛇這ふごと谷底の岩清水



稲架掛くる嫁姑とは見えぬ仲

鐘楼へ庫裏へと法の道をしへ

爽やかや神鈴の音頭に享けて

一斗缶吊るすは谷戸の鳥脅

近寄れば大女なる案山子かな

秋晴れて掃除ロボット機嫌よし

茅葺の屋根匂ひ立つ夕立かな

梅花藻の流れに浸す大やかん

月下美人帰宅の夫に開きけり

朝蟬の鳴き出す迄の庭仕事

汗引きぬ氷室めきたる玄室に

ビール干し介護疲れを癒やしけり

青時雨森のごとくに大櫓

小気味よく胡瓜を刻むリズムかな

風船をつけて浮きさうべビーカー

呆け防止とて大股に青き踏む

闊歩せる鶏たちに下萌ゆる

炭を焼く煙に日矢の斜めかな

花道に舞ふ衣擦れの淑気かな

連獅子の足ふみ揃ふ初芝居

初鏡介護の日々に負けまじく

門先を掃いて了とす年用意

人波の中に見慣れし冬帽子

古曆苦難の日々を語り草



電柵に触れてはならじ栗拾ふ

堰にさしかかりし澗の水澄める

神鏡も斯くやと仰ぐ今日の月

稲穂越し産土神を遥拝す

蝉とりの尿飛ばされて捕り逃す

炎天へ人を吐き出す回転ドア

対峙せる二匹の守宮月の壁

遅刻するわけにはいかず炎天下

小康の夫を連れ出し螢狩

高欄の足下を埋む花の雲

飼育士に猿が耳打ち園うらら

地蔵在す千年櫛洞温し

一雨に噴いて春子の子沢山

はんぺんの膨れつ面やおでん鍋

糸寒天白波のごと乾きけり

朝市の主客が囲む焚火かな

同郷と久闊を叙すおでん酒

凧や固まつてゐるドアボーイ

ぶり大根あらと謂へども氷見の鰯

剥製の猪牙をむく狩りの宿

アイライン引き立たせゐるマスクかな

添へ棒をされて自然薯届きけり

天の底抜けしごと雨台風裡

物忘れ笑ひ飛ばして暑氣払



シートベルト要る助手席の大西瓜

吉と出し水占や宮涼し

夏越とて真名井の水を家苞に

水鏡して螢火の纏れけり

白雲の過ぎりゆく空花棟

引戸また機嫌斜めや梅雨に入る

青梅雨のきらめき落つる鎖樋

棚田風匂ふ八十八夜かな

襖襦干す竿に小さな鯉のぼり

巢燕を見上げて潜る仁王門

風が掃く舗道の落花豊かな

春蘭を目当てに山路遠回り

いかなご船待つ大釜を滾らせて

老犬の歩を励ましつ青き踏む

眼鏡の度あはぬ言ひ訳歌がるた

飛行雲ぐんぐん伸びる初御空

新築の窓に灯ともる聖樹かな

マフラーを覆面巻きにバイクの娘

人力車庭に待機す紅葉宿

七曲り抜けて展けし蕎麦の花

もう括る他なし萩の乱れやう

吠え立てる犬を一瞥穴まどひ

出囃子の杜に響くは村芝居

故郷の島の高きに登りけり



ホームまで葛押し寄せる山の駅

生徒らの農園葡萄朝市に

蠅叩き空打ちをして満を持す

秋の蚊に好かれて一人酔ひにけり

白桃のどこから刃物いれやうか

露天湯の四囲山襖星月夜

検問や手招きされし片かげり

マイカーの背凭れ倒し緑蔭に

三尺寝携帯電話鳴つてをり

一輛は風鈴の鳴る能勢電車

寄る辺とす神の櫛の樹下涼し

草笛や遠き竹馬の友に吹く

吊り橋の足下を見よや朴の花

石仏の里の軒々燕来る

門川の涼し比叡の水なれば

大津絵の鬼が出迎へ春灯

空谷の桜隠れに一山家

谷戸の駅沈む万朶の花の中

カーナビは旧道が好き山笑ふ

里の山トンネル抜けるたび笑ふ

露味噌の出来は上々一人酌む

豆雛 マツチの箱を高御座

おほどかに袖ひろげたる古代雛

しやがみ見る節分草の目覚めしと



車座に無縁仏や洞ぬくし

糸寒天己が身透かせ乾きけり

脳天に音突き刺さる寒の滝

舞ふ文字に園児喝采吉書揚

初夢の中でも何か探しもの

降りる鴨翔つ鴨朝の湖広し

真つ先に蒟蒻に箸おでん鍋

目鼻入れられて団栗笑ひだす

夕焼に弧の水脈曳きて入港す

長々と白き築地や十三夜

奏者なき自動ピアノのうそ寒し

数減りし鈴虫庭へ放ちけり

長 寿 眉 揃 ぶ 宮 役 秋 祭

野 良 着 翁 今日 は 礼 服 秋 祭

百 歳 の 手 押 し 車 に 供 花 の 菊

海 凧 ぎ て 一 枚 鏡 翳 雲

岩 襖 響 か せ て 落 つ 行 者 滝

真 つ 直 ぐ な 道 ど こ ま で も 翳 雲

話し居る二人と見しは案山子かな

秋暑し数珠なすタクシー黒ばかり

白壁のタトウーとなりし守宮かな

星月夜里山息をひそめをり

朝顔の今日は何色窓開くる

国生みの島より立ちし雲の峰



畳の間なるが馳走や大昼寝

吊り橋の涼し奈落に荒瀬見ゆ

目高の子追ひかけてゐる虫眼鏡

青葉木菟育む神の大櫓

鮎の膳猪名の早瀬をまのあたり

怨念のごと毛虫焼く女かな

虹告げにまた病室に駆け戻る

バス停の標識を越ゆ立葵

田植女の御田に一礼して上がる

麓まで包む山氣やほととぎす

退院の夫に新茶の封を切る

香水の一人加はり昇降機

浜薄暑入り日を返す倉庫群

草を引く五指を熊手のごと使ひ

幹に花噴かす力や老桜

垣越えて隣より来るしやぼん玉

田ほとりに農婦が捏ねし泥雛

春泥の羊に逃げる牧の子等

下  
萌  
の  
林  
道  
深  
き  
轍  
あ  
り

空  
き  
部  
屋  
の  
一  
面  
鏡  
に  
あ  
る  
余  
寒

野  
の  
春  
を  
見  
つ  
け  
る  
課  
外  
授  
業  
か  
な

檻樓纏ふごと白菜の霜枯れて

酒蔵の暗きに笑まふ享保雛

ある筈の肝溶けてゐる鮫鰯鍋



水晶の欠片散らして樹氷落つ

スーパ一の弁当で祝ぐ女正月

笑ひ皺一つ増えたり初鏡

潮騒を枕故郷の寝正月

気に入りのペンに拘り初日記

単身の隣も呼びて晦日蕎麦

路地隔て托鉢僧と社会鍋

螺旋灯忙し師走の理髪店

年用意捨つることより始めけり

しぐるるや岩に現れたる多尊仏

酒蔵の高き小窓に冬日洩る

のぞきゐし吾を手招きす菊主

舞殿の足跡は猿神の留守

大輪の菊籬とす野点席

黒潮の海を遥かに蜜柑摘む

日向ぼこ玉座にお尻はばからず

縁側に向けミシン踏む石落日和

虫の闇次のバスまで半時間

野仏のお目元に映ゆ曼珠沙華

畦に腰おろし棚田の秋惜しむ

この辺と見し丁目石葛がくれ

力石否冬瓜の売れ残る

稔田の海へなだるる平家村

一本の杭秋水を二夕分けす



羽衣のごと雲纏ふ今日の月

秋燕ダム湖に夕日撒き散らし

鳴きとおす鈴虫の音に寝ねやらず

後手をつきて星観る端居かな

かなぶんのノックしてをる厨窓

正座せるままにまどろむ生身魂

指揮棒を振りたし万の向日葵に

浦を行くバスがらんどう大西日

立ち話尽きず片蔭細りゆく

手荷物  
の腕に食ひ込  
む暑さかな

家族分釣  
れてよしとす  
鮎の膳

師の影を踏  
みて潜りし茅  
の輪かな

住み古りて玻璃戸の守宮親しかり

筍に底抜け落ちし紙袋



# 定例句会入選句

とんど果つ谷戸に東雲明りかな

歓声を浴びてとんどの大崩れ

ちりちりと天降るとんどの灰神楽



空青し青しと見れば鳥渡る

神の庭天降るがごとき黄葉かな

団栗の掛かりし蜘蛛の留守団かな

とび翔ちて雀とわかる庭落葉

秋うらら牧に仔牛の保育園

チーズ工場目指して牧を避暑散歩

雷神を呼びよせたるか飛瀆神

大蒜の棒のごとくに莖立ちぬ

空谷のなぞへを埋む羊齒涼し

園丁ら横一列に草を引く

水難碑訪へば裏から雨蛙

飛びきては落花畳を乱す鳩

裸木の珠と散りばむ雨雫

立浪のごとくに丘の梅白し

真紅なる聖體ランプ四旬節

磊々はみな丸き石水温む

シスターと立ち話して冬うらら

火渡りをせむと跣の翁かな

塀のなき農家の庭や立葵

水位計梅雨の出水のここままでと

梅の丘港神戸をパノラマに

大根焚オールの如き大杓文字

身に入むや震禍のままに立つ鳥居

寒禽や樹下に鎮もる力石



う  
ら  
ら  
か  
や  
宮  
に  
犬  
用  
手  
水  
鉢

力  
石  
少  
し  
離  
れ  
て  
蟻  
の  
道

樹  
下  
涼  
し  
マン  
モ  
グ  
ラ  
フ  
ィ  
ー  
検  
診  
車

根上りのよき手摺なす登山道

茶屋涼し瀬音に和して鳥語降る

閻王の鏡曇らす春埃

火の粉撒きとんどやぐらの崩れ伏す

バス降りる人を待つやにゐのこづち

マスクしてゐても姦しをみなどち

ルイビイトン欲しクリスマスシヨツピング

レシートに膨るる財布十二月

病める夫突如冷奴を所望

野仏にトタン屋根あり夕立来る

春水の階なせる芦屋川

点々と散らばる谷戸の藁ぼつち

句を拾ひ栗も拾ひつ能勢山路

リフトいま足下を埋む濃紫陽花

誰が魂ぞ吾につういと来る蛍

神事待つ御田掠めてつばくらめ

見送りの母の日傘のいつまでも

昇りゆく蛍揚げば七ツ星

バラの園アンネの像を要とす

評判のケーキ屋は此処燕の巢

まどろみに似し地蔵の目梅日和



観音の光輪抜けて風光る

ロゼワイン酌みてわたしの女正月

竹爆せて峡にとよもす大とんど

歌かるた犬養節に詠みにけり

懐メロは我が青春歌年忘れ

利酒の胃の腑に落ちて合点す

石叩仏足石を教へけり

くぐる橋低しと奇声舟遊び

大男隣に座り秋暑し

はらからも僧も老いたり孟蘭盆会

記帳する筆の先へと桜散る

母の忌に母直伝の蓬餅

くつきりと灘の潮目や花菜畑

句会には行くつもりらし春の風邪

対局をと見かう見して扇風機

平城京より蹤いて来し草虱

一両車御慶を述べて発進す

笛鳴きに応ふ笛鳴き良寛碑

通過せし車にすがり行く落葉

母を撮るコスモス畑へ連れ出して

つむ撫づるごと紫陽花の毬に触れ

遊覧船かもめ引き連れ水尾涼し

牡丹の火照りをさます日照雨かな

シャンソンをうたおうかしらリラの雨



軍港の湾真つ平夏燕



吟行句会入選句

指呼されしいかなご漁へ遠眼鏡

潮垂らす檻褸布のごと若布干す

秋晴や杭に長靴逆さ干し

神名備の奥処山菜萁明かりして

石に伏し苔に仰向く落椿

簾吊る木造校舎外厠

花に浮き花に沈みて観覧車

振舞ひの地酒に酔ひぬ村祭

浮草にかがめば水の匂ひけり

炎天に迷ひし路地は行き止まり

紅葉宿文豪来しを誇りとす

村まつり主役は稚児の巫女袴

出格子の軒にさ揺らぐ釣忍

廊涼し鶯張りの音もまた

青しぐれ旧家の蓑洗ひけり



纏れつつ風に抗ふ恋螢

里山路夜目に浮き立つ栗の花

茅葺きの片屋根のぞく緑かな

窯二つ阿吽に並ぶ炭焼き場

添水鳴る落柿舎の庭去り難く

無縁仏肩寄せあへる紅葉影

激つ瀬の大岩洗ふ涼しさよ

行く程に溪狭まりて河鹿笛

口に笏当てて男雛は何洩らす

縁側の乞食雛に射す日かな

鴟高音古墳の由来聞きをれば

秋の蝶木つ葉しぐれに紛れけり

高舞へる螢に聳ゆ杉襖

万緑の森深閑と思惟仏

磨崖仏涼し早瀬の楽もまた

東雲の夏霧に現る杉美林

河鹿宿しるき瀬音に目覚めけり

樹幹縫ふ夏霧迅し杉美林

滴りの真珠つなぎや苔の先

日射すとき虹現るる神の滝

万緑の丹生の真名井に嗽ぐ

川とんぼ激ちし宇陀の瀬にあそぶ

びつしりと十薬咲かせ薬師堂

車椅子同士の会釈薔薇の園



道の駅取り囲みたる豊の秋

阿羅漢の忿怒ゆるびし小春かな

七堂伽藍雪解雫の音奏づ

うちの猫こんなところに涅槃絵図

涅槃図の裾より亀の急ぐかに

雪解水垂るる地蔵の福耳に

ウインドに銀色の靴クリスマス

着物美人まどろむ京の暖房車

数珠を編む指に見とれる路地小春

連衆の顔火照らせて  
炉辺の句座

曼珠沙華藪の奥へと  
飛び火して

二面石見てより  
秋思憑きにけり

遠望に朝日弾くは鳥威

杉の秀の黒く聳ゆる月の影

秋灯煤けきつたる飛鳥仏

身にぞ入む頬傷深き飛鳥仏

水琴窟聞えぬ耳に藪蚊刺す







## あとがき

永年の勤めを退いたあとインターネットを通してウェブサイト「ゴスペル俳句」との不思議なご縁を得たことが私の俳句生活の始まりでした。何度も挫折しそうになりましたが続けてきて本当によかったです。

振り返りますと、明日香、吉野、能勢での一泊吟旅に参加できたこと、二日間で四回、五回句会をするという考えられないような苦行でしたが、これらの鍛錬会によって本物の俳句の面白さを体験できたことが一番の転換期であったと思います。

今年は古稀の節目でもありお薦めも頂いたのでこれまでの作品を句集に纏めることに致しました。句を読み返していると、この十年は主人の度重なる大病や介護の日常

とが重なり一句一句の裏側が鮮明に蘇ってきて感慨一入、まさに生きた証しであり私の宝物になりました。みのるさんには句の再選とともに身に余る序文まで賜り誠にありがとうございます。

日記果つ何時も誰かに助けられ うつぎ

昨年の暮、心の底から湧き出た一句です。介護という重い枷があつたからこそ今日まで俳句を続けることができました。親しい仲間と一緒に吟行しては自然の息吹に生きる勇気が与えられ、句会に参加することで慰め励まされてきたように思います。

苦難をも生きる力に変えていただけるのは俳句仲間や介護のサポートをして下さる方々、そしてなによりも背後で応援してくれる主人のお陰です。心から感謝とお礼を

申し上げます。これからもなお今を生き、今を詠み晩年に向かって精進してまいりたいと思えます。

平成三〇年五月吉日

岩原 うつぎ



『月下美人』 岩原うつき句集

平成三〇年七月一八日 印刷

平成三〇年七月一八日 発行